

# 國學院大學學術情報リポジトリ

井上ひさし「貧乏物語」論：  
河上肇の「不在」と「貧乏」の意味をめぐって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學大学院文学研究科 公開日: 2025-05-21 キーワード (Ja): 井上ひさし, 評伝劇, 河上肇, 貧乏物語, テクスト生成 キーワード (En): Hisashi Inoue, critique biographical play, Hajime Kawakami, Binbō monogatari, text generation 作成者: 崔, 雪婷 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/0002001635">https://doi.org/10.57529/0002001635</a>

# 井上ひさし「貧乏物語」論 —河上肇の「不在」と「貧乏」の意味をめぐる—

## A Study of Hisashi INOUE's *Binbō monogatari*

Focusing on Hajime KAWAKAMI's absence and the meaning of Poverty

崔 雪 婷

キーワード：井上ひさし 評伝劇 河上肇 貧乏物語 テキスト生成

**Key Words:** Hisashi INOUE critique biographical play Hajime KAWAKAMI

*Binbō monogatari* text generation

### 要旨

戯曲「貧乏物語」は井上ひさしが創作した河上肇の評伝劇であり、評伝対象が登場しないことによって特別な存在となっている。井上ひさしは河上肇の「不在」を前提にし、六人の女性の登場人物の会話を通して河上肇像を構築している。また、テキスト生成過程を考察すると、戯曲『どん底』が間テキストとして引用され、井上ひさしはゴロキイの描いた「精神的貧乏」に陥った「世界」を戯曲「貧乏物語」に投影したことで、視点を物質的な面から精神的な面へと転換し、現代社会における「貧乏」という問題を提起して再検討している。

### Abstract

*Binbō monogatari* is a critique biographical play about Hajime KAWAKAMI, written by Hisashi INOUE. It is distinctive because the protagonist of the biography does not appear on stage. Based on KAWAKAMI's absence, INOUE portrays the protagonist's image through dialogues among six female characters. Furthermore, the process of the text generation shows that the play *The Lower Depths* is cited as an intertext. INOUE projects Maxim Gorky's depiction of a "world" trapped in a "spiritual dilemma" onto *Binbō monogatari*, shifting the focus from the material level to the spiritual level, and re-examines the issue of "poverty" in modern society.

### はじめに

「貧乏物語」は井上ひさしが書いた評伝劇であり、1998年10月に東京の紀伊國屋サザンシアターで初演された。戯曲のタイトルは日本のマルクス主義経済学者の河上肇(1879-1946)の代表作『貧乏物語』に因んでいる。この前の評伝劇作品と比べれば、「貧乏物語」は短くて幕も場もあらず、先行研究も極めて少ない。

この作品は河上肇を主人公とする評伝劇だと知られているが、河上肇は登場せず、登場人物は河上肇の妻ひでと次女のヨシ、そして、女中の加藤初江、元女中の田中美代、内務官僚と結婚した竹内早苗、新劇の女優の金澤クニという6人の女性である。ひでとヨシは実在の歴史人物だが、ほかの4人は虚構の人物である。6人演劇は井上ひさしの戯曲においては少なくないが、全員女性の設定は「頭痛肩こり樋口一葉」しか見られない。女性間の会話を通して日常の悩みを描くという劇的雰囲気は、「頭痛肩こり樋口一葉」に共通しているが、評伝の対象としての主人公の「不在」によって、劇の構造と創作手法はかなり異なる。特に、6人の女性が投獄された男性主人公のことを語るという構造は、三島由紀夫が1965年に発表された「サド侯爵夫人」と同じである。

井上ひさしが主人公の「不在」を設定した上で、どのように河上肇像を構築したのかを分析する必要がある。さらに、間テキスト性の角度から戯曲「貧乏物語」のテキスト生成過程を考察し、井上演劇における「貧乏」の意味および「貧乏」をなくす思想的価値を明らかにする。

## 一、「貧乏物語」における評伝対象の「不在」

河上肇は1932年8月に日本共産党に加入し、1933年1月に共産主義運動に参加したため逮捕され、その後、治安維持法違反で5年の懲役刑を言い渡された。戯曲「貧乏物語」の時間設定は1934年の春であり、場所は東京市中野区相生町の借家であり、この時点で河上肇は拘留中である。戯曲における河上肇像は、主に登場人物らの会話を通して形成されている。

河上肇は登場しないが、井上ひさしは舞台美術に関するト書きで、「長押の上に、河上肇博士の大きな肖像写真」<sup>(1)</sup>を飾ると明記した。そのため、演劇の冒頭に次のような場面が展開される。元女中の田中美代が訪れると、家に誰もいないが、彼女が見上げて河上肇の写真を見つけ、すぐに平伏し、写真に「このたびは小菅で懲役五年のお勤め、まことにご苦労さまでございます。先生はむかしから胃腸がお弱かった。お食事にはどうぞお気をつけてくださいませ」(第222頁)と

---

(1) 井上ひさし、「貧乏物語」、『井上ひさし全芝居 その六』。新潮社、2010年、第221頁。戯曲の引用は全て『井上ひさし全芝居 その六』によるため、これからページ数のみ記入する。

言った。河上肇の胃腸の状態が後にも何度も言及される。井上厦は冒頭から河上肇の病気を強調することで、普通の人と同じような脱神話化する人物像を構築する。

それから、河上肇の弟子であった竹内一夫と結婚した早苗と、河上肇の著作を読んでいる金澤クニが登場する。クニは初めて河上家を訪れ、「この二十年間、何百万ものひとたちが奪い合うようにして先生のご本を買ひ求めたというのに留守宅がこんなにも粗末だったとは……！」(第231頁)と言って、美代は「質素節約」(第231頁)が河上肇の口ぐせを教えたが、河上思想に詳しいクニはこれが「河上肇の利他主義」を反映していると考え、河上肇の写真を見ながら、「わが身はかわいい、しかし、他人のことも気にかけて仕方がない(中略)『貧乏物語』に、たえず流れている考え方です」(第232頁)と説明した。クニは『貧乏物語』に対する理解を述べながら、河上肇の代弁者として語り続ける。

では、世の中から貧乏をなくすにはどうしたらいい？ みんなでなるべく贅沢をつつしみながら、国の骨組みを変えて行けばいい。先生はそうお考えなんですわ。(中略)そこで先生は、同じような考えをもって、世の中にたいして懸念にはたらきかけているひとたちの活動のために、質素節約で余らしたお金をお差し出しになった。そればかりか、カンパだけでよしとはなさらずに、ご自分からその活動にお加わりになった。書齋から世の中へお出になり、そして最後は地下に潜って活動をおつづけになった。(二人に)これが『貧乏物語』からあとの先生のお考えと行動なんですわ。(写真に)なによりもわたしたちのこころを打つのは、先生の言行一致のお覚悟。考えっぱなしではない、云いっぱなし書きっぱなしでもない、ご自分のお考えに誠実に行動なさいました。これはすごいことですわ。(第232頁)

登場する6人の女性において、金澤クニは河上肇の著作の読者として、彼の生涯と思想を紹介する役割を果たしている。また、クニという人物から、河上思想が同時代の人々に与えた大きな影響が伺える。クニのような読者が庶民でありながら、河上思想に対する熱烈な支持や河上肇本人への崇敬は、演劇の舞台を通して現代の観客に巧みに表現されている。

ヨシとひでが帰宅した後、女性らは美代の「古い」を受けた。美代は世間の悩

みは結局家庭、健康、仕事、恋愛、縁談、お金、失せ物という七つだが、「河上先生のようなお方は特別で、(中略)先生には『天下国家』というお悩みが加わって、八つということになります」(第243頁)と述べた。つまり、社会の底辺で生きている美代のような市井の人でさえ、河上肇が「天下国家」を考える姿を理解していることがわかる。

戯曲の前半は上述したように、河上肇が終始「不在」であるが、女性らの会話が進んでいるうちに、彼に関する情報が直接的に紹介された。戯曲の後半は一転して、当時の日本政府が河上肇を降伏させるための様々な手段に焦点を当てて描かれている。舞台の雰囲気は、軽やかな家庭劇から、特別高等警察の多方面からの圧力でどう対処するかという緊迫したプロットへと変わる。例えば、中野警署の警察はまず河上夫人に、河上肇が明日帰宅できるかもしれないとほのめかし、続いて連絡がきて、翌日緊急で刑務所での面会に呼び出し、夫人本人のみが指定される。それから、早苗は息を切らせて駆け込み、普段は仕事について話さない夫が突然「国家的な機密」(第262頁)と告げたことを伝える。その内容は警察が河上肇の社会主義活動を助けるという理由で、河上夫人を逮捕し、次女のヨシもこの前の大森ギャング事件で訴追されることになる。最後に、緊迫した雰囲気の中で、外からナイフが投げ込まれ、添えられた手紙には「河上ひでに關の孫六の名刀を贈呈する。面会時に、汝の夫を刺せ。しかるのちに、汝も自害せよ。非国民絶滅愛国青年団本部」(第265頁)と書かれた。しかし、この一連の出来事が続くことで、女性らは疑念を抱くようになり、最後に河上肇を転向させることを絶対しないと決意する。また、早苗は夫に騙されて利用されたことに気づき、直接的に夫と対決することにした。

井上ひさしは河上ひでやヨシらが特別高等警察の脅迫や誘惑に巧みに対処する様子を軸にし、河上肇の周りの人々が彼の思想を理解し、彼を支持することを表現している。

お国の方から見れば、河上先生は大きくて邪魔っけな広告塔ですわ。(中略)主義者(筆者注：社会主義者)を一人一人捕まえては、きりが無い。捕まえているそばから、広告塔に引き寄せられてつぎつぎに新しい主義者がふえて行く。ひかり座にも、その予備軍が大勢おりますわ。(中略)お国にとっては、その方がうんと能率がいいんでしょう。広告塔が消えてなくなれ

ば、そういう考え方がこの世にあったかどうかさえ、わからなくなりますものね。(第264頁)

以上の金澤クニのセリフを通して、井上ひさしは河上肇が精神的な指導者としての重要な地位を描いている。河上肇の思想が当時の国家体制と衝突していたが、逮捕されてもこの「広告塔」は倒れることなく、むしろ揺るぎない信念によってその光をさらに明るく照らしている。

河上肇と同様に、河上ヨシも積極的に共産主義運動に参加する党员である。しかし、ヨシは大森ギャング事件で逮捕された後、厳しい拷問を受け、凌辱される直前に内心の防壁が崩壊し、「わたしの考えはまちがってました」(第267頁)と書き残して釈放された。その後、彼女は自分がやったことが実際に組織内部に潜入したスパイMによって日本政府が仕掛けた罠であったことがわかった。この銀行強盗事件は人々に共産党に対する恐怖心をおこさせた。ヨシは自らの転向声明に心の苦しみを抱えることになり、「ここからわたしは真っ二つに分かれてしまった。『あの地獄から脱け出すためには仕方がなかったのよ』とわたしが言う。すると自分の方は『お前はかけがえのないものを捨ててしまったのだからもう河上ヨシではない』と云い張る。わたしは自分とが日に何百回となく云い争いをして、夜中などは気が狂いそうになるわ」(第268頁)という。ひではヨシの状況を心配する同時に、「同じおみをお父さまにさせてはいけない」(第268頁)と意識している。ひでも揺るぎない信念を持つようになり、夫を揺るがせることを許せず、特別高等警察の様々な手段はこの瞬間に全て崩壊した。

河上ひでは肇の妻として、彼の支持者であり、彼の追求を深く理解する人でもある。「もしもこの世に神様がおいでになるとしたら、その神様とは、じつはほんとうのお友だちのことを云うのではないか。(中略)河上肇は大切な夫です。でも、それよりなにより、あの人はわたしのほんとうのお友だちなんです。ですから、河上肇はわたしの神様。向こうできっとそうおもってください。その神様に向かって、『これまでのお考えはまちがっていたとお書きなさい』とは、とても云えませんか。」(第270頁)この時点で演劇「貧乏物語」はそろそろ終わるが、河上ひでは河上肇の信念を共有する「战友」ともなっている。生活の面でも、精神の面でも、ひでは前線に身を置く最も堅固なバックである。

河上肇の著作を熟読した金澤クニ、学識のない美代、特別高等警察に利用され

た早苗、また、妻や娘としての河上ひでとヨシにとって、河上肇は質素儉約を重んじ、天下国家を考える研究者として、尊敬すべき人である。河上肇が逮捕された時期は、日本が軍国主義化し続ける時代であり、河上家の状況からも当時の日本社会の様子を垣間見ることができる。井上ひさしは、異なる階層に属する6人の女性を描写することで、特別高等警察からの圧力に直面した際に、彼女らが如何に機知と勇気をもって時局の圧迫に応じるか、さらに、河上肇が動乱の起こった社会環境に如何に強権に抗い、多くの人から深い信頼を得ている姿を描き出している。

## 二、戯曲「貧乏物語」のテキスト生成<sup>(2)</sup>とその間テキスト性

井上ひさしは戯曲「貧乏物語」を創作する前に、「河上家の次女」という文章で「この河上芳子を女主人公に立てて、大正から昭和にかけての日本を書いてみたいが、小説にするか、それとも戯曲がいいか、それで迷っているところである」<sup>(3)</sup>と書いた。翌年、井上ひさしは鶴見俊輔との対談で「河上一家には興味があります」<sup>(4)</sup>と再度言及し、河上肇が入獄前後のことや、河上家の他の人々の経験を詳しく整理した。筆者は彼の遺した創作資料への調査によって、河上芳子に関連する資料を大量に見つけた。例えば、「埋もれた婦人運動家⑨河上芳子—河上肇博士の次女—」<sup>(5)</sup>などの文章のコピーが残された。

そして、井上ひさしは戯曲「貧乏物語」を創作する際に、主として河上秀の『留守日記』<sup>(6)</sup>を参考したことがわかる。彼は構想メモに河上秀の日記から「1933年2月-7月」「1933年7月-12月」「1934年1月-7月」「1934年8月-」「1935年2月-」「1935年6月-」「1935年12月-」「1936年4月-」<sup>(7)</sup>などの部分を抜粋した。しかし、戯曲の決定稿の時間設定と重なる1934年春の抜粋内容は、プロットには多く反映されていない。井上ひさしは1935年からの抜粋において、河上芳子と夫

(2) 本節で考察した創作原稿は全て仙台文学館に所蔵されている。

(3) 井上ひさし。「河上家の次女」。『新潮』、1996年9月、第411頁。

(4) 「鶴見俊輔・井上ひさし対談『日本人の記憶を総合する財産』」。『週刊読書人』、1997年4月18日、第(2)版。

(5) 師岡佑。「埋もれた婦人運動家⑨河上芳子—河上肇博士の次女—」。『婦人公論』、1972年10月、310-317頁。

(6) 河上秀、『新版留守日記』、岩波書店、1997年。

(7) メモした時間は1998年7月14日である。

の鈴木重蔵に関する内容に焦点を当てている。これにより、戯曲創作の初期段階に、井上ひさしは芳子を中心に資料収集を行ったことが明らかになる。また、前テキストとして「河上芳子、湊キミ、斎藤コク、広沢直江、中村房子、鈴鹿とし子」という六人の女性の人物紹介が残されているが、河上秀が含まれていないバージョンである。さらに、『奔馬 河上肇の妻』<sup>(8)</sup>の著者である草川八重子は、河上肇に関する貴重な資料の所在を井上ひさしに詳しく紹介した<sup>(9)</sup>ことがわかる。

実際に戯曲を創作し始めると、井上ひさしはワープロで、河上秀を中心にプロットを設定した。このバージョンには、秀が17歳の時に河上肇と結婚するから、52歳の時に河上肇が釈放されるまでの重要な節目がまとめられており、「戸沢検事の脅し。『河上秀を起訴してもいいのだよ』』というような内容も含める。このプロットは、戯曲決定稿において、劇的な衝突のクライマックスとなるため、この時点で物語の構想がほぼ形成されたと判断できる。特にこの作品の前テキストがかなり少なく、初期構想と決定稿のプロットには多少の違いがあるが、井上ひさしは最初から河上肇を登場させない形で評伝劇を創作することが明らかである。

井上ひさしは戯曲「貧乏物語」を発表する時に、主要参考文献を公開した。『河上肇全集』<sup>(10)</sup>や『新版留守日記』<sup>(11)</sup>などの基礎文献以外、ゴーリキイの戯曲『どん底』<sup>(12)</sup>も含まれている。戯曲「貧乏物語」には『どん底』のセリフを引用する一方、この2つの戯曲の間テキスト性は無視できない。

ゴーリキイの戯曲『どん底』(1902)は4幕からなっている。この作品は、木賃宿に住んでいる浮浪者らを描き、店主夫婦、泥棒、娼婦、職人、かつての舞台俳優、没落した貴族、困窮した知識人などの人物をめぐって、社会のどん底に生きている人々の悲惨な生活を深く掘り下げ、希望を失った彼らの残酷な運命を描き出している。巡礼者であるルカは底辺の人々に運命を受け入れるようと説得することで、彼らの生活の苦痛を減らし、希望を与えように見えるが、実際には人々の思考能力を麻痺させるのである。ルカの説得の影響で、木賃宿での貧困にあえ

(8) 草川八重子. 『奔馬 河上肇の妻』. 角川書店, 1996年.

(9) 時間は1997年7月15日である.

(10) 河上肇. 『河上肇全集』(全八巻). 岩波書店, 1982-1986年.

(11) 河上秀. 『新版留守日記』. 岩波書店, 1997年.

(12) ゴーリキイ. 中村白葉 訳. 『どん底』. 岩波文庫, 1997年第66刷.

ぐ人々は、結局現状を変える能力を失い、最後に幻想が破れた時に、彼らは絶望に陥り、死亡、入獄、放浪、行方不明というようなさらなる悲惨な結末を迎えることになった。

サーチン：(前略)世の中にゃ、人の心を慰める嘘もありゃ、やわかげる嘘もあり……労働者の手を押しつぶすようなひどい仕事を弁護する嘘もありゃ……飢え死にしかけてるやつを責めたてる嘘もある……おれは嘘のこたよく知ってるよ！気の弱え者や……人の汁を吸って生きてるやつにゃ、嘘は必要物だ……あるやつらは嘘でもってるし、あるやつらは嘘に包まれている……だが——しっかりした人間……人を頼りにしない、他人のものをあてにしない人間には、嘘をつく必要は少しもねえ。嘘は——奴隷と君主の宗教だ……真実は——自由な人間の神さまだ！<sup>(13)</sup>

上記の引用は、第4幕における浮浪者であるサーチンのセリフである。これはある程度で作者のゴーリキイがルカの唱えるどん底の人々を救う説教に対する不満を表現すると同時に、帝政ロシア時代の皇帝による厳しい支配の下で、民衆を搾取することに対する不満も表している。

井上ひさしは、「貧乏物語」に『どん底』の第2幕と第4幕で、「明けても暮れても、牢屋は暗い。よるひる牢番、えい、やれ！わが窓みはる。見張ろとままよ、おいらは逃げぬ。逃げはしたいが、えい、やれ！鎖が切れぬ。ああこのくさり、わがくさり、てめえは、鉄の牢番よ。おれにゃ切れぬ、てめえは切れぬ」<sup>(14)</sup>という作中人物が歌う歌を引用した。「貧乏物語」において、この劇中歌は金澤クニが歌っている。

クニ：「明けても暮れても 牢屋は暗い よるひる牢番 えい、やれ！ わが窓みはる」(中略)「見張ろとままよ おいらは逃げぬ。逃げはしたいが、えい、やれ！ 鎖が切れぬ」(中略)『どん底』の公演が決まり

(13) ゴーリキイ. 中村白葉 訳. 『どん底』. 岩波文庫, 1997年第66刷, 第141頁。

(14) ゴーリキイ. 中村白葉 訳. 『どん底』. 岩波文庫, 1997年第66刷, 第5頁。

ましたの！

ヨシ：(ぱつと表情を輝かせて)ゴリキイの作ね、ロシアの作家の。(中略)父にすすめられて読みました。よかったわ。(中略)わたしはこう読みました。貧しい人たちがたむろする木賃宿に、ルカという巡礼のおじいさんがやってきて、ひとは希望を持つことが大事だと説く。でも、希望を持つことで、かえってみんなが不幸になってしまう。

初江：すると、ひとは希望を持たない方がいいんですか。

ヨシ：いいえ。希望ということばを作り出してしまった以上、たとえ不幸になろうが、希望を持つことがひとのつとめなの。その希望の中には、ひとはだれも同じなんだという考え方もある……。

初江：……ふーん。

クニ：そう、そういうお話で、わたしの役はアンナ。地上の地獄のようなその木賃宿の、ほら穴のように暗い地下室で弱って死んで行く哀れな錠前屋の妻。いい台詞がたくさんあるんですよ。(身振り入りの台詞)「あたしゃ一度だって、腹いっぱい食べたという覚えがない……パンを一きれたべるにも、いつもびくびくものでね」(中略)「あたしゃ一生、ふるえてばかりいたんですよ」(後略)(第254頁)

井上ひさしは『『どん底』の上演』を1つのエピソードとして戯曲「貧乏物語」に挿入した。本来、特別高等警察の検閲により社会主義思想の含まれる演劇は公演不可能だったが、金澤クニは、厳しい社会環境でキャリアの転機を迎え、2週間後に小樽の港湾労働者会館で『どん底』の初日公演のために必要な交通費を得るために、4本の金冠の歯の中から1個を売った。最後には演出家が特別高等警察に逮捕され、公演は実現しなかったが、クニは依然として希望を抱いており、「新宿の紀伊國屋書店で臨時の店員さんをしながら、あいかわらずお芝居の勉強をしています」(第275頁)と理想を諦めない。

ゴリキイの戯曲『どん底』は間テキストとして、戯曲「貧乏物語」のテーマを深化させる役割を果たした。ゴリキイは、帝政ロシア時代の皇帝の厳しい支配と、社会のどん底に生きている人々の苦しい生活および硬直化した思想に対する強い批判を展開し、井上ひさしは『どん底』の「世界」を戯曲「貧乏物語」に投影した。特に1933年2月に小林多喜二が東京で逮捕され、その後、特別高等警察の

暴行で虐殺されたという大きな社会事件があり、井上ひさしはそれを背景にして1934年春という時間を設定し、軍国主義の道を歩み始め、侵略戦争を引き起こした日本国内の言論統制を反映している。戯曲には絶対主義的天皇制の支配した暗黒の社会環境を直接的に描写しなかったが、日本政府の嘘をあばき、社会主義思想を広めようとする河上肇も、獄中で小林多喜二と同じような状況に直面している。さらに、上述した2つの戯曲のもう1つの共通点は、いずれも「貧乏」をテーマにしたことである。『どん底』を引用した戯曲「貧乏物語」は、河上肇の人生に基づき、もっと豊かな視野を入れ、「貧乏化」に抵抗する意味を深化した。

### 三、「貧乏」をなくす思想的価値

戯曲の題目に因んでいる『貧乏物語』は文学作品ではなく、河上肇が書いた論文である。1916年に『大阪朝日新聞』に連載され、翌年3月に書籍として出版されてから、すぐ当時のベストセラーとなった。『貧乏物語』は第一次世界大戦下に誕生し、河上肇は論文において「貧困」に関する3つの問題を提起した。即ち「いかに多数の人が貧乏しているか」、「何ゆえに多数の人が貧乏しているか」、「いかにして貧乏を根治しうべきか」<sup>(15)</sup>という。経済学者である河上肇は、社会問題としての「貧困」に焦点を当て、古今東西の典籍を引用し、経済学の視点から、経済格差が主な原因だと指摘し、貧困問題を解決するために富裕層が贅沢をやめるのが改善策だと主張している。

事実として、河上肇が『貧乏物語』を執筆した時期は、戯曲の時間設定の18年前であり、題目から想起させた時間と時間設定の間にはズレがある。島村輝氏は、「貧しさとは、モノの乏しさをのみ指すのではない。ありあまるほどモノがあふれていても、無知と無自覚によって人々が流されていくならば、それは真の豊かさとは程遠いところに行き着かざるを得ない」<sup>(16)</sup>と指摘した。また、川本雄三氏は「河上肇という人の、人道主義的な立派な人格と周囲に及ぼしたその感化という、倫理感覚の失われた現代への批判にも通じる」<sup>(17)</sup>と評価した。24年後の

---

(15) 河上肇、『貧乏物語』。岩波書店、1995年版。

(16) 今村忠純 編集、島村輝、『『貧乏物語』』、『国文学解釈と鑑賞別冊 井上ひさしの宇宙』。至文堂、1999年12月、第341頁。

(17) 川本雄三 渾大防一枝、『演劇時評』、『悲劇喜劇』、1999年1月、第87頁。

2022年に、小松座が「貧乏物語」を再演し、水落潔氏は「この作品も今の日本を写している」<sup>(18)</sup>と、依然として評伝劇と現代社会とのつながりを指摘した。

上述した先行研究には、戯曲「貧乏物語」は現代日本の社会問題を反映して批判していると指摘したが、「貧乏物語」の「貧乏」は具体的に何を指しているのか、また、河上肇の『貧乏物語』から井上ひさしの「貧乏物語」への転換によりどのような時代精神が伺えるのだろうか。

まず、戯曲に女性のみ登場するという設定は、作品の視点を社会の周辺に焦点を当てることがわかる。1930年代に、日本の女性は明治時代と比べて教育を受ける権利や就職する機会が増えたものの、初江のように教育を受けることのできない女性や、早苗や美代のように夫に頼らなければ生きていけない女性が存在していた。劇中、美代が占いをする場面は、実際に一人一人が直面する困難、即ち女性らが抱える多岐的な問題を表面化する。例えば、竹内早苗の夫は特別高等警察の利き手であり、不倫をして他の女性と子ができたが、早苗は我慢して離婚しないように願っている。加藤初江は記者になりたいと考えており、母親の理解を得られず、家を出て河上家の女中になったが、やはり親子関係を修復して家庭の和睦を望んでいる。金澤クニは役者になる夢をもっているが、特別高等警察の厳しい検閲によって、芝居が何度も公演直前にキャンセルされたため、仕方なくカフェで働きつつ夢を追い続け、河上肇の著作と思想に強い関心を寄せている。河上ひでは夫が逮捕され、弟の大塚有章も獄中で体調がよくないという状況を心配している。つまり、牛鍋を食べられる彼女らは、物質的條件の面で社会の底辺に属していないが、上述したあらゆる「不自由」は日本社会における思想の面での抑圧や人々の精神的な「貧乏」を示している。

次に、河上ヨシのような、社会主義思想の影響を受けて積極的に運動に参加する女性は、思想が自由であるが、思想が不自由な社会環境で逮捕されて拷問を受けた。逆に、河上肇の弟子である竹内一夫は、当時の日本が宣伝する政策に従い、完全に支配階級に迎合することで早く出世し、さらに妻を利用して自分の恩師を転向させようとした。竹内一夫は権力を持ちながら人間の思考力を失い、権力者の「道具」になる。夫の影響で、早苗は社会主義に言及するだけで心細くなる。

---

(18) 水落潔、「時代を超える名作の生命力」、『テアトロ』、2022年6月、第44頁。

早苗：（思わず声を低めて）だってほら、河上肇先生は赤い思想をひろめたという重罪で小菅にいらっしやるでしょう。お嬢さまのヨシさんは、一昨年の赤いギャング事件の犯人の一人でしょう。（中略）大森の銀行に三人組のアカが押し入って現金三万円を奪って逃げた事件で、そのお金をアカの地下の秘密本部まで運んだのがヨシお嬢さま。しかもよ、その赤いギャング団のキャプテンが、奥さまのじつの弟さんで、いまは市ヶ谷刑務所にいらっしやるわけでしょう。さいわいヨシお嬢さまは帰っておいでのようなだけけれど、いわば河上家は、いまがどん底、アカもアカのまっかっか。……あ、これは世間で云っていることばなの。（225-226頁）

最初に、早苗は夫と同じ思想を受け入れたことがわかる。竹内一夫が河上肇の学生であったため、彼女が河上家に訪れる目的は、自分の不幸な結婚生活を語るだけだ。早苗は河上肇の思想についても十分な理解をもたず、自身の人生を変えようとする考えもなく、金澤クニが警察に対する批判も理解できず、夫のために弁護しようとした。クニは、特別高等警察が「この非国民め」（第248頁）と怒鳴られ、検閲でわざと劇団の公演をキャンセルさせた結果、多くの劇団が巨額の負債を抱え、劇団が大量に解散してしまったと述べている。たとえ役者が哀願しても、警察は「上の方（中略）内務省の警保局のお偉方の御意向なんでね、わしら現場ではどうにもならんよ」（第248頁）と全く耳を貸さない。つまり、権力者は思想を統一するために、国民の日常生活が正常であるかどうかを問わず、ただいわゆる「主流思想」と異なる群体に厳しい弾圧を加えている。これらの命令を実行する警察らは、自らの行動について考えることもなく、竹内一夫より低いレベルの「道具」となっている。日本の支配階級が思想の統一を強化する行為は、社会のあらゆる階層にまで及び、自由思想と人間性を抹殺した。

戯曲の後半に、早苗は河上家に伝言する際に、周りの女性らの揺るぎない信念と河上夫婦の関係に感化し、自分が夫に利用されたことに気づいた。一連の事件を経験した早苗は自らの判断力を取り戻し、自我意識の覚醒を果たし、「離縁状を叩きつけ」（第270頁）ると決意した。早苗は現状を変える一歩を踏み出した後、「クローバーという銀座の洋装店のお針子さん」（第275頁）になって自活できる生活を始める。早苗の人生の転換は、まさに女性の思想が「貧乏」から自由へ

の転換だと言えるのだろう。

河上肇の『貧乏物語』は現代社会でもしばしば話題になる<sup>(19)</sup>が、戯曲における「貧乏」は、既に河上肇が提起した「物質的貧乏」問題から逸脱し、井上ひさしが指摘した「精神的貧乏」問題へと完全に変わっている。井上ひさしは、日本が侵略戦争を始めた時期における人々の人生を描くことを通して、権力に屈服する人々の「精神的貧乏」を指摘した。戯曲は、観客に日本現代社会に存在する様々な「不自由」の問題を想起させ、異なる時代の歴史的文脈と重ね合い、現実とのつながりを遂げた。

## おわりに

戯曲「貧乏物語」は評伝対象である河上肇の「不在」によって、評伝劇としては特別な存在となっている。井上ひさしは6人の女性が未登場の河上肇のことを語る形で物語を展開し、当時言論の自由もない時代に社会主義思想を宣伝して実践し、人間のあるべき独立意識と反抗精神をもっている河上肇像を浮き彫りにしており、女性群像劇で「精神的貧乏」という社会問題を巧みに提起している。

戯曲に「貧乏」の意味が再解釈され、異なる時代の文人らの関心を反映している。この再解釈は、河上肇の『貧乏物語』やゴーリキイの『どん底』から影響を受けたが、井上ひさしが問題を提起した上で、希望に満ちた結末を設定することに注目すべきである。登場する全ての女性は、最後にある意味で自らの人生の主導権を握るようになり、河上肇思想の影響を受けて「精神的貧乏」の束縛から解放された。「貧乏」をめぐる様々な問題の解決策として、井上ひさしは精神的豊かさというポイントを現代社会にも伝える。

[付記] 本稿は2024年度天津市社会科学規畫項目「日本当代反戰題材戯劇研究」(課題番号: TJWWQN24-002)の研究成果の一部です。

## 参考文献

- 井上ひさし. 「貧乏物語」. 『井上ひさし全芝居 その六』. 新潮社, 2010年.  
井上ひさし. 「河上家の次女」. 『新潮』, 1996年9月.

---

(19) 戴錚. 「日共黨員河上肇所著『貧乏物語』百年之後再成熱點」. 『中華讀書報』, 2017年1月4日, 04版.

「鶴見俊輔・井上ひさし対談『日本人の記憶を総合する財産』」。『週刊読書人』, 1997年4月18日, 第(2)版。

師岡佑。「埋もれた婦人運動家⑨河上芳子—河上肇博士の次女—」。『婦人公論』, 1972年10月。

河上秀。『新版留守日記』。岩波書店, 1997年。

草川八重子。『奔馬 河上肇の妻』。角川書店, 1996年。

河上肇。『河上肇全集』(全八巻)。岩波書店, 1982-1986年。

河上秀。『新版留守日記』。岩波書店, 1997年。

ゴースト。中村白葉 訳。『どん底』。岩波文庫, 1997年第66刷。

河上肇。『貧乏物語』。岩波書店, 1995年版。

今村忠純 編集。島村輝。「『貧乏物語』」。『国文学解釈と鑑賞別冊 井上ひさしの宇宙』。至文堂, 1999年12月。

川本雄三 渾大防一枝。「演劇時評」。『悲劇喜劇』, 1999年1月。

水落潔。「時代を超える名作の生命力」。『テアトロ』, 2022年6月。

戴錚。「日共黨員河上肇所著『貧乏物語』百年之後再成熱点」。『中華読書報』, 2017年1月4日, 04版。